

---

# 街の仕事屋さん + いろいろ。

三味線乃介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

街の仕事屋さん＋いろいろ。

### 【Nコード】

N2306BA

### 【作者名】

三味線乃介

### 【あらすじ】

古風な街の仕事人と、愉快的仲間たちの物語。

## 000 除霊がしたかったです

ぼろぼろに崩れた赤煉瓦と、色あせた茶色の屋根を持つ館。体育館ほどの大きさが、不気味さをより一層引き立てる。

かつて英国貴族でも住んでいたと言われれば、嘘にはならない。けれども、そんな栄華は一片も残っていないかった。

「おいおい、こんなところで仕事をするのかい？ 御免だね」

俺はわざと冷ややかに言った。仕事がしたくない訳では無かったが。

「まあそこを頼みますよ、夜上<sup>やかみ</sup>さん」

神父の服を着た男は、甘ったるい口調で答えた。話し方がムカつく。

大体なんで聖職者たる者が除霊もできないんですか、と言おうとしたが、その必要は無かった。

「あの霊、ちょっと強いんだよ。ね、お金はいくらでも出すからさ」

聖職者になっても金か、腐ってるぜ。

だが仕事が無くなつては困る。

「……分かったよ」

俺はしぶしぶ了承したように言った。

「ありがとう！ じゃ、健闘を祈るよ」

腐れ聖職者は何かを隠すように、走って、どこかへ言ってしまった。

おいおい、お札も持たないで大丈夫なのかよ？ 大体、除霊っていつでも何すりゃいいんだよ？

疑問はもう解消できなかった。あいつ、逃げ足だけは速いな。

俺は舌打ちしてから、館と呼ぶにはあまりにも情けない廃墟に、足を踏み入れた。

俺は、夜上リユウヤ。

某国際都市の片隅で仕事人をしている。

仕事人といっても、人殺しをしている訳ではなく、犬の散歩をしたり、解体屋の手伝いをしたりしている。街の便利屋と言ったところだろうな。

除霊は何度もしたことがある。ただ、お札も持たず、除霊の手順もうろ覚えなのはこれが初めてだ。

懐中電灯だけで除霊ができるなら、観光客でもできるじゃないか。それを俺に頼むほどの理由があるのか？

まあいいや、この不景氣にいい仕事が出来たもんだぜ。

それにしても不気味だ。西洋人はこんなものに神秘を感じるのか？  
今も昔も埃だらけだったんだろうな。

廊下も無駄に長い。そのうえ赤絨毯が敷いてあるが、高貴な気分にはならない。

何も出なかつたらそれはそれで問題だがな。

聖職者が幽霊を何かと見間違えたんだったら、もう笑い話だ。

ははは、と大きな声で笑ってみた。

声が廊下中にこだまするだけで、返事はない。

さつきからドアを開けたり閉めたり単純作業が続いている。

飽きてきたが、ただで帰るわけにはいかない。

……そうだ。

出てこないなら呼び出せばいいじゃないか。

俺は木製のドアを開けて、部屋に入った。

召使いの部屋だろうか。いつかの高貴な館にしては、随分と小さな部屋だ。

埃を被った本棚には、年季のある本が揃っている。

その中に申し訳なさそうに置かれた、黒いインクの入った瓶。

テーブルの上には、先端が黒ずんだ羽ペンが寂しそうに置かれていた。

椅子に座って、ペンを握ってみる。なんとかかなりそうだな。

次いで本棚から緑表紙の本を取り出した。

それから適当なページを開いて、破り取った。にじみそうだな。

最後に、インクを取って、瓶の蓋を開けた。勢い余って少しこぼしてしまった。

ペンの先をインクに浸した。そして、一気にアルファベットを書き上げた。

日本人に習った「こつくりさん」をやる時が来たようだ。まさかこんな所でやるとは思ってもいなかったが。

硬貨は……無いな。ペンでもいいだろうか？

ペンの先を鳥居というシンボルの上に乗せて、静かに言った。

「こつくりさん、こつくりさん、どうぞおいでください。もしおいでになられましたら『はい』へお進みください」

反応しない。もう一度、言った。

「こつくりさん、こつくりさん……」

そこまで言いいかけたところ、いきなりペンが動き出し、「はい」へ向かって動き出した。

驚いた。マジでなるのかよ。

しかし驚いてばかりもいられないので、次の質問に進むことにした。

「鳥居にお戻りください」と言うと、ペンはゆっくりと鳥居に向かって動き、止まった。

「こつくりさん、こつくりさん、この館で怪奇現象が起こっていることをご存知ですか」

ゆっくりと「はい」。女性の声が聞こえた。

思わずペンを投げ捨て、声がしたほうを向いた。

こつくりさんの途中で持っているものを放してはいけないそうだが、関係ない。

そこに居たのは、真っ白な女性の幽霊だったから。

## 001 借り暮らしのなんとかティ

こつくりさんをしていたら、本物が現れた。しかしそれはいわゆる幽霊といった類からはかけ離れていた。いや、あまりにもかけ離れすぎていたので、俺は口を開けたまま何もできなかった。

毎度の事ながら、幽霊というのは綺麗な人が多いもんだと思う。彼女の肌は、絹のように白い。というか、全てにおいて白い。布のような服を着ているようだが、ちよつと危なっかしいぜ、これ。

「どうしたの」

彼女はきよとした顔をしながら言った。強気なもんだ。おそらく箱入り娘だったのだろう。仕事には関係ないか。俺は少し考えた。そんなに強い霊だとしたら、ただでは済まなさそうだが。

「罰ゲームで肝試しをすることになってね」

少しおどけた感じで言ってみた。あれ、待てよ？ ただのいじめられっ子じゃないか！大体、こんな所に一人で来ている時点でもうかなり怪しいぞ。……などと思っていると、彼女はいきなり微笑んだ。

「除霊でしょ？」

「うん、まあ」

おおかた予想はしていたが、バレバレだった。まあこんな所に好き好んで来る人はそういないもんな。

「あんた面白そうだね。名前はなんてーの」

「リュウヤだよ」

「よろしくね、リュウヤ。あたしはミューズって言うの」

そう言うと、彼女は手を差し伸べた。白くて、本当に綺麗な手だ。彼女の手を握ろうとしたが、つかめない。そうか実体がないんだなと改めて思ったが、だからといって握手しないわけがない。優しく、彼女の手を包み込むように握手をした。

「で、本題なんだが、除霊を……」

話を切り出そうとして、ためらった。こいつはそんなに悪い奴じゃないぞ。何か目的があつて、ここを荒らす人を追い払ってるんじゃないか。

「やめた。除霊はしないから、他人に迷惑をかけないでくれるか」「いいよー」

彼女は笑顔でそう答えた。あつさりしてるなあ、こいつ。

「その代わり、お願いがあるの」

「等価交換つてやつか。何だ？」

「あたしがいなくなったら、ここもじきに取り壊されると思うの」「そうなるだろうな」

「でも、あの首輪だけはとっておきたいの」

そう言いながら、彼女は本棚の上に置いてある銀の首輪を指差した。あんな所にあつたのか。

「それとさ……行き場所が無いんだ、あんたの家に住んでもいいかな」

えっ、そうなるのか？

「まあ……それでいいなら構わないぞ」

「やった！」

彼女は満面の笑みを浮かべた。仕事はもうどうでもよかった。それより完全に落ちぶれてしまった神父のほうを憎たらしく思った。俺は立ち上がり、本棚の上の首輪を取った。光沢を放つその首輪は、彼女の首の大きさにぴったりだった。だが実体が無くなった今では、それは意味を成さない。今は彼女の願いを叶えてやるのが仕事だ。

「じゃあ行くか」

俺とミューズは部屋を出た。古い館を出ると、新しい街がいつもより古く見えた。太陽は少し傾きかけていた。何人か振り向く人がいたようだが、別にどうでもいい。害が無いのを連れ回して何が悪い！　ってか、見える人って思ったよりいるもんだな。

家に戻ると、胡散臭い口調の聖職者が待っていた。

「やべえ神父だ、隠れる隠れる」

「えっ、えっ」

ミューズはどうやら間一髪で隠れたようだ。うざい男がこっちに向かってきた。

「いやあ助かったよ。おかげで教会の威厳を失わずに済んだよ。報酬はいくらにしようか？」

黙れ、俺はお前らの威厳のために仕事をしてるんじゃないんだよ。勝手な勘違いはこれでお終いにしろカルト団体め。心の中でありとあらゆる罵詈雑言を吐いた。

「幽霊なんていなかったぞ」

「えっ」

神父は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた。正確にはいなくなっただけだな。

「まあた冗談を、ほら、あそこにいたじゃないか」

「何かと間違えたんだろ。とにかく全てチャラだ、報酬はいらない」

「そうだったか……とにかく、うん、ありがとう」

そう言って、落ち込んだ神父は足早に去っていった。なんとかごまかせたみたいだな。

「おい、もういいぞ」

俺は屋根の上に隠れているミューズを呼んだ。彼女はすぐに降りてきた。

「ふいーっ、神父って怖いね」

彼女は震え上がりながら言った。すごく怖がっている。

「そうか？俺にとってはただの黒い服のおっさんなんだが」

俺はそう言って、ペットボトルの水を一気に飲み干した。冷たい感触が喉の中で踊る。今日もいい仕事をしたものだ、と思った。

俺たちはドアの鍵を開けて、中に入った。いつも通りの、でかいテーブルと少しの植木鉢しか置いていない、殺風景な部屋だ。

「何も無いね。絵でも買ったら？」

「うるさい」



買いたいのはやまやまなのだが、そんなことをするとあつという間に火の車だ。それなら消費支出に充てるほうがいいだろう。我慢してくれ。

「で、どこで寝たらいい？」

「そうだな……」

俺は少しためらった。幽霊も寝るのかと思ったが、それ以上に問題なのは、仮にも女子と同じベッドで寝るのはどうかということだ。「ベッドがな……一つしか無いんだが……まあいいや、ベッドで寝てくれ」

決断した。その気になれば、地べたでだって寝られるはずだ。

「えっ、いいの？ 本当にいいの？ 後悔しない？」

「しつこいなあ、大丈夫だよ」

思わず激しそうになった。少し落ち着こう。仮にも相手は箱入り娘だぞ、言葉遣いの一つや二つ気にしていたら気がふれちまう。

俺はオフィス（といっても、接客するだけの場所なのだが）から階段を上り、寝室に向かった。階段はミシミシと音を立て、今にも崩れそうだ。……妖怪退治でもして稼ぎたいものだ。

「へーえ。妖怪退治とかどうなの？」

えっ。ちよつと待って、俺はまだ何も言っていないぞ？ おおかた予想はしていたんだが、そういうのもありか。

「あたし、心が読めるんだ」

「ははあ」

俺はおどけた口調で言った。久しぶりの感覚だった。何年も接客をしていると、ごくたまに（それも年に数回だが）超能力と言うべきか、そんな人が訪れるのである。そのときの驚きと少しの好奇心に似た感覚が蘇ってきた。経験から来る、俺の後天性の超能力が反応したのであった。

「すげーな、いつからできたんだ？」

というか、話題ができたので助かったといったところだ。

「生まれたときからあったよ。なんていうか、考えることが、そ

のまま私に伝わってくるんだ」

「なるほど」

これは何か事件でも起きそうだな、と思った。

さて。部屋に入ると、俺は蛍光灯の電源を入れた。ここで気付いたのだが、ミューズは光が嫌いではなさそうだ。

「お前、光は平気なのか」

俺はそう尋ねた。

「うん。やっぱり苦手だろうって思ったでしょ」

「そんなもんじゃないのか」

「幽霊はイレギュラーしかないんだよ」

そうか、と俺は思わず感心した。本当に面白い奴だと思う。今までいろいろな人と接してきたわけだが、こんなに面白い奴は初めてだ。第一幽霊は除霊という言葉を聞いただけでみな震え上がるものだろうと思っていたが、こいつは何も怖くはなさそうだ。ひょっとしたら除霊が何をするのかなのか理解していないだけなのかもしれないが。ただなぜか神父のことをひどく怖がっていたようだ。やはり幽霊としての意識はあるのだろうか。さあて一段落したところでふとミューズを質問攻めに見してみようかなと思った。困ったことに、俺はたまに人を質問攻めにしてしまう癖がある。

「ちよつと質問してもいいか」

俺はそれを始めるとき、決まっていつもこう言う。

「いやーだ、あつかんべえ」

きつちりあかんべえ付きで断られてしまった。なんか可愛いから許してしまいたくなる。と思っていると、彼女はいきなりベッドに飛び込んで、うつ伏せに寝てしまった。

「どうしたんだ？」

「寝る」

「そうか」

やっぱりお化けであることに変わりはない。俺もちよつくら寝るかな。押入れから布団一式を取り出して、そのまま布団にくるまっ

てしまった。たまの昼寝はいいものだなあ、これからは三食昼寝付きのビジネスに切り替えるかな。うん、それがいい。つつい一人問答をしてしまった。

「リユウやあ」

甘い、眠たそうな声が聞こえた。

「何だ」

「起きてるう？」

「ああ。どうした」

「おやすみい」

「それだけかよ」

俺はそれだけ言っで、ふいと深い眠りにつこうとした。こんな他愛も無い会話が、いつまでも終わることなく続けばいいのだが。

## 002 よい子は早寝早起きに限ります

目が覚めた。枕もとの時計をつかんで、顔の前に近づける。午後八時だった。まだ良い子も眠っていない時間に起きてしまった。さてこれからどうしようと思ってベッドの方を見ると、そこにはしわだらけの布団だけがあった。

ミューズがいない。どこに行ってしまったんだ、あいつは。あきれ返ったところで、幽霊だからなあと思って電気をつけ、布団をしまおうとすると、

「ねえ、かくれんぼしよ」

という声が聞こえてきた。腹話術のような、どこから聞こえたともつかぬ声だ。靈感の無い普通の人なら腰を抜かしかねない。まあ慣れもあるだろうがね。

「いいぜ。ただし、こうしよう。負けたら今夜は勝ったほうの言うことを聞く」

「面白いじゃん」

童心に帰って楽しむとするか。

「鬼はリウヤがやって」

ミューズの声が聞こえた。助かった。レーダーみたいに人を見つけては困る。しかしここでもう一つの問題が浮かび上がった。南無三、あいつは幽霊で、姿を隠せるじゃないか！ どっちにしろ厄介なもんだ、と思いながらも仕方が無いので立ち上がり、辺りを探してみた。見つからん。クローゼットの中にも、ベッドの下にも、窓の外にも、どこにもいない。部屋中探してみたが一向に見つかる様子は無い。姿を隠しているのかも分からない。

ふと 俺の脳裏に妙案が浮かび上がった。これなら勝てる！

幸いなことに家の周辺には空き家しかないので近所迷惑にもならないはずだ。俺は吸えるだけの空気を吸い込んだ。そして、ただ一言、  
「神父だっ！」

と叫んだ。どつと疲労が襲ってきた。鏡を見ると、顔が真っ赤になっていた。肩で息をしながら部屋中を見回した。

そのときだ。背骨から何かが抜けるような不思議な感触があった。一瞬吐き気を催したが、それが何かを理解するのに時間はかからなかった。背中からミューズが、掃除機のコードを引っ張ったときのように、しゅるつと出てきた。

「いやーっ！　お願いやめてやめてえ！」

と思うと、いきなり泣き喚き、地面に仰向けになり、じたばたと足を動かした。駄々をこねている子供のようにも見えた。ちよつとやりすぎたか。

「はは、冗談だぞ？　神父なんていない」

声をかけてみたが、まだ泣き止まない。ちよつとした悪戯のつもりだったが、トラウマを呼び起こしてしまったようだ。いかんいかん、どうにかして落ち着かせなければ。俺はベッドに座り、ミューズを抱き寄せた。不思議なことにそのときは気付かなかったが、感触があった。彼女は少し戸惑ったようだ。優しく頭を撫でた。ようやく泣き止んだようだ。彼女はじつとりとした目で俺を見つめた。

「ごめんごめん、そんなに怖がるとは思わなかったよ。かくれんぼは俺の負けだ」

俺は子供の頃のように、優しく語りかけた。

「むー、ひどいよー」

彼女はふくれっつらになって言った。可愛い。早くこいつが安心できるような世界になってほしいものだ。教会を潰すほうがいいのか。そんなことを思いながら深い眠りにつこうとしていた。

「約束だよ」

ああそうだった。やべえよ、何を言いつけられるか分からんぞ。箱入り娘さんよ、どうか軽めの刑でお願いします。

「今日はこのまま寝よ？」

戸惑った。おいおいどんな爆弾発言が出るかとは思っていたが、マジか。だが命令には背けない。それに、そんなことで許されるの

なら何でもやってやる。

「おーけーだぜ」

俺はこのままベッドに飛び込んだ。今考えるとものすごいセクハラだったんじゃないかと思う。彼女の肌は温もりを持っていた。さながら生きているようだった。彼女はもう眠りについていた。起きるのも寝るのも早いな。俺も早く寝よう。

幽霊に負けてしまった。何だか別の意味で悔しかった。まあ自分から負けに導いたようなもんだが。子供の遊びは、正々堂々とやるからこそその面白さがあるんだな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2306ba/>

---

街の仕事屋さん+いろいろ。

2012年1月10日20時46分発行